

シリーズ いしかりの子どもたち ③

子どもの居場所



▲「ガラクタウオースライダー（町のはらっぱ事業）」。

「考える力、想像する力を伸ばす環境づくりを！」
子どもたちの居場所づくりを目指して、
今、市内各地ではさまざまな試みが展開されています。

「つくる」「考える」場所

◆町のはらっぱ事業

子どもたちが自由に発想し、考え、体を使って遊ぶことで健やかに成長できる環境を整えたい。それが市の本年度から取り組む「町のはらっぱ事業」の目的です。

ここでいう「はらっぱ」とは、花川北にある石狩消防署隣の市有地のこと。6月3日、廃材を利用した第1弾「みんなであつくりろー！ ガラクタひみつきち」には小学4年生から6年生までの約40人が参加。天候にも恵まれ、子どもたちは青空の下、トンカチャノ

コギリによる慣れない作業に汗を流しました。

当日は、市リサイクルプラザから2人の「元大工さん」が派遣され、子どもたちに道具の使い方や基地作りをアドバイス。しかし、大抵それは子どもたちからの「棟梁！棟梁！」と呼ぶ声に応じたものであって、「安全が確保されている限りは、子どもたちの自由に任せた」とは、棟梁の二人、齋藤弘さん。

その言葉どおり、完成した基地は、大人の発想ではとても考えられない、

奇抜なアイデアが至る所に施されたものでした。中でも際立っていたのは、屋根から突き出た2本の長い棒。隣のもう一つの基地に絶対真似されないものをと工夫した結果で、天に向かって伸びるその奇妙なシルエットに大人たちは「これぞ子どもの発想！」と、ただただうなるばかりでした。

同事業はその後、7月に小学校低学年を対象にした「ガラクタウオースライダー」、幼児対象の「みんなであそぼうー！ どんこマウンテン」と続きました。市として初の試みと





▲サイエンスプラザ石狩
ドクターたちの〈科学的な考え方〉に触れて、真剣なまなざしで聞き入る子どもたち。



前野さん



徳田さん



宮台さん



千葉さん



佐藤さん

◀「サイエンス・アイ」のメンバー。「アイ」には石狩の頭文字「I」と「愛」、そして科学の目の「eye」を掛けています。

なった同事業を、こども室の三國義達室長は次のように振り返ります。「子どもの安全管理と子どもの自主性は、片方を重要視すれば片方が失われます。このバランスをどう取るか？それがらっぱ事業でチャレンジしたことでした。反省点もありましたし、次年度は地域とのつながりをさらに強めながら、展開したいと思っています」

◆サイエンス

プラザ石狩

今年5月から、月1回程度の割合で、市内の児童館を会場に科学相談室「サイエンスプラザ石狩」が開かれています。企画するのは、市内に住む5人の科学研究者たちのグループ「サイエンス・アイ」。

メンバー全員が北大名誉教授で、専門分野もそれぞれ異なり、前野紀一さんが「雪氷物理」、佐藤教男さんが「電気化学」、千葉忠俊さんが「化学工学」、徳田昌生さんが「有機化学」、宮台朝直さんが「磁性物理」。子どもたちの理科離れを憂い、「石狩の子どもたちに、科学の楽しさと大切さを伝えたい」という思いから、子どもたちが最も集まる児童館という場所を舞台に、実験を通して科学の面白さを伝えて歩きます。

7月8日、おおぞら児童館で開催されたときのテーマは「どうして鉄の船が浮かぶの？」。普段、疑問にも思わないことを、疑問に思うこと。それが科学に最も必要な「目」であり、「子どもたちには、まずその目を養ってもらいたいのです」とは、代表を務める前野さん。

さらに、この科学相談室の特徴は、答えを無理に求めないこと。この目の実験でも、木製の人形や陶製のちよこを取り出して、水に浮かべたり沈めたりしながら浮力の秘密に迫りましたが「だからこうなる」と、無理やり結論に結び付けたりしません。

「簡単に正解を求めるのではつまらないものです。私たちは問題を論理的に整理してあげるだけ。子どもたちが本や実験、インターネットで調べて答えに近づくお手伝いをしたい」

自分で考え、それが分かったときの喜びが何にも替えがたいことを、メンバーたちはよく知っています。

彼らが目指すのは、へ考えるべききっかけを子どもたちに与えられる場所づくりなのです。



▲リサイクルプラザの「トンカチ教室」 トンカチ片手に廃材を使って自由に工作が楽しめます。冬休みも開催予定!



◀いしかり砂丘の風資料館の体験講座「化石のレプリカをつくる」 博物館と同じ方法でレプリカ作りに挑戦。気分は学芸員?